事業推進の心　仮設労働安全新生プラン

陽のあたる安全文化の創造

もうよそう　ヒューマンエラーの他人事
築こう　安全足場で身近なしあわせ
めざそう　安心して暮らせる　心豊かな国創り

ACCESS新聞
Alliance Cooperation of Construction Equipment & Scaffolding for Safety
Vol.119

編集・発行人　篠田伸夫
発行所
全国仮設安全事業協同組合本部
〒103―0001
東京都中央区日本橋小伝馬町
15―18　日本橋ＳＫビル
ＴＥＬ03―3639―0641
ＦＡＸ03―3639―0640

北海道支部	〒004―0015	札幌市厚別区下野幌テクノパーク２―１―14	電話(011)899-3275	ＦＡＸ(011)899-3276
東北支部	〒980-0802	仙台市青葉区二日町13-22-407（カルコスビル４Ｆ）	電話(022)713-6051	ＦＡＸ(022)713-6052
関東支部	〒103―0001	東京都中央区日本橋小伝馬町15―18（日本橋ＳＫビル５Ｆ）	電話(03)3639-1571	ＦＡＸ(03)3639-3980
北信越支部	〒950―0923	新潟市姥ヶ山6-5-26（白木ビル2-B）	電話(025)257-0066	ＦＡＸ(025)257-0067
中部支部	〒457-8535	名古屋市南区浜田町1-10　２Ｆ	電話(052)614-0701	ＦＡＸ(052)614-0705
近畿支部	〒550―0006	大阪市西区江之子島１―６―８（シャンピア阿波座1003号）	電話(06)6443-5213	ＦＡＸ(06)6443-5214
中国支部	〒730―0016	広島市中区幟町3―55（幟町ゼネラルビル6Ｆ）	電話(082)511-2051	ＦＡＸ(082)227-2720
四国支部	〒769―2101	香川県さぬき市志度1883-１（大河原ビル202）	電話(087)814-2245	ＦＡＸ(087)814-2246
九州支部	〒811―2101	福岡県糟屋郡宇美町大字宇美字古野ノ口3426-9	電話(092)957-0032	ＦＡＸ(092)957-0033

ホームページhttp://www.kasetsuanzen.or.jp/　Eメールinfo@kasetsuanzen.or.jp　各都道府県の支所へのお問い合わせは、各ブロックの支部まで連絡ください。

アクセスと連盟の使命は訴えることの組織化

座談会「ドクターヘリと建設職人社会のあり方」

現場の声を組織の活動に反映すべし

10年目を迎えた全国仮設安全事業協同組合と、去る5月25日に設立された当組合の政治連盟である「建設職人社会ルネッサンス連盟」は、それぞれ「青年部」の活動を始めました。今回は、青年部の佐古篤彦会長と5人の副会長が認定NPO法人「救急ヘリ病院ネットワーク」（HEM―Net）の國松孝次理事長をお訪ねし、建設職人の安全・安心や社会貢献、活動の意義などについて語り合っていただきました。

國松　孝次氏

佐古　篤彦氏

伊東　雅史氏

小野　大氏

杉山　亮氏

藤田　武敏氏

宮内　大介氏

座談会出席者

▽國松　孝次氏（認定NPO法人救急ヘリ病院ネットワーク理事長）▽佐古　篤彦氏（全国仮設安全事業協同組合青年部会長）▽伊東　雅史氏（同副会長）▽小野　大氏（同副会長）▽杉山　亮氏（同副会長）▽藤田　武敏氏（同副会長）▽宮内　大介氏（同副会長）▽司会・和田　惠（日刊建設通信新聞社取締役企画営業総局長）

和田　本日は、HEM―Netの國松孝次理事長を囲んで、建設職人の安全・安心を中心に語り合っていただこうと思います。HEM―Netとアクセスは、人命尊重の理念を共有しています。日々の活動を通じた話題を提供していただきながら、安全の重要性と必要な取り組みなどについて提言できたらと考えていますが、話を進める前に國松理事長より質問があるということですので、まず口火を切っていただきたいと思います。

國松　お話に入る前に、一つ質問ですが、「建設職人社会ルネッサンス連盟」というのは、いかなる組織ですか。

佐古　いわゆる政治連盟です。ことしの5月25日に旗揚げしました。政治連盟をつくりましたのは、われわれの長年に亘る制度改正要望がなかなか実現しないということが背景にあります。昨年の6月に60年ぶりに足場の安全に関する安衛則の一部が改正されましたが、重要な部分は厚生労働省の安全衛生部長通達に委ねられているということで、満足のいく制度改正には至っておりません。

HEM―Net　アクセス　人命尊重の理念共有

一方、現政権はさまざまな政策実現を政治主導で行うとしています。ということであれば、アクセスとして政治連盟をつくり、制度改正を働き掛けるべきではないかということになりました。

役員構成としては、アクセスの役員が政治連盟の役員にも就いており、青年部の役員がそのまま連盟の青年部役員であるというような形になっています。

國松　職人社会のルネッサンス（再生、復興）を期するための政治連盟ということですね。

宮内　そうですね。いまの時代、残念ながら、職人は処遇を含めて大切にされていません。かつてのような誇りの高い、ちゃんと暮らしもやっていける、「お父ちゃんの跡をおれも継ぐよ」と、そういう社会であるべきじゃないかということで「ルネッサンス」と名乗っています。「開かれた明るい希望に満ちた建設職人社会を目指して」というのが、われわれの看板です。

國松　それは、いいことですね。政治連盟と言うと、なにやら、裏にまわって駆け引きをする団体という印象もありますが、貴連盟は、まさに職人社会でのルネッサンスを実現するために、自分たちのことを世によりよく知らしめ、働く仕組みも変えていくことを目的にしているのですね。

職人さんというのは、黙々と自分の技を磨けばいいということが、本来の姿です。ただ、残念ながら、現代は、それだけではうまく行かない。実際の技を磨きながら、それを社会に認めさせる広い意味でのPRを行うことが大切で、そういう才覚がないと駄目だと思います。だから、そういう意味では、この政治連盟というのをおつくりになったというのは、いいことだと思います。

それはもう僕らがやっている「HEM―Net」でも同じことですが、「ドクターヘリ」というのはいいことだとみんな思ってくれるわけです。しかし、一生懸命ドクターヘリを現場で活用して、いい医療をやっていれば、必ずみんながついてきてくれて、一気に世の中にドクターヘリが普及するかと言えば、そうではない。ドクターヘリの良さを根気よく世に知らせる努力をし、ドクターヘリを普及する仕組みを作っていかないといけない時代になってきています。

和田　そうですね。そういう現実とどう向き合っていくかということが重要ですよね。

國松　そうだと思います。まさに、まつりごとです。政治という言葉は、広がりのある言葉です。物事を制度として動かしていくために必要な技という意味もある。その意味では、建設職人さんも、政治的な存在とならなければならないところがあります。

そこで、青年部の皆さんにお聞きしたいのですが、どのような活動をされていく方針ですか

◆◇◆

佐古　先日も青年部の会合で、どのような活動をしたらいいか話し合いをしました。実際に建設現場で使用されている機材には、材料的に古くなっており、一向に経年管理もされていない製品や海外から輸入された粗悪品もあります。これを防ぐためにはどうすればいいか。まず、機材の経年管理について研究を進めます。それとは別に、海外から入ってきている昇降足場の研究もしたいと思います。

また、本来法制化すべき案件が現在、安全衛生部長通達止まりとなっています。これを法制化するにはどうしたらいいかについても勉強する予定です。アクセスには篠田専務理事を始め、行政経験豊かな理事の方々がいらっしゃいますので、法律がどのようにでき上がっていくか、その過程などを勉強していこうと考えています。

和田　ほかの方たちにもお聞きします。就任して期するものがあると思うのですが。

伊東　足場から墜落して死亡する事故が相変わらず年間を通して多いので、改正安衛則の徹底とともに、安全衛生部長通達に明記されている「手すり先行工法」、すなわち「二段手すり」と「つま先板」の浸透とさらなる進化などを青年部として進めていきたいと思っています。

小野　行き過ぎた経済至上主義とでも言いましょうか、「安いものはよいものだ」という世の中になっていると感じます。その対極にあるのが、アクセスの活動の底流にある人命尊重の考えです。アクセスは発足して10年が経ちました。伊東さんの話にもありましたが、昨年は60年ぶりに安衛則の一部改正が行われ、6月1日に施行されました。そういうところをしっかり汲んでいくのが僕ら青年部の役目なのかなと考えています。また、安全衛生部長通達の立法化については、私としては遠くない時期に法整備されると確信していますけれども、僕ら青年部のほんとうの役目というのは、立法化のための運動はもちろんですが、立法化された後、どういう形で継続して、どう発展させていくのかということであろうと感じています。

杉山　副会長という非常に重要なポジションに就き、毎日学ぶことが多く、発見の連続です。

実際に現場において、職人さんに直接お話を聞くと、「厳しい」という話題に事欠きません。金額的なこともそうですし、常に危険と隣り合わせの職場ということもあります。先ほどから話に出ている法改正を含め、安全な仕事場、そして生活が充実するような職場をつくっていくことが必要であると考えます。それには、職人さんたちだけではどうしようもない部分もあると思いますので、実際に材料を供給させていただいているような私たちも、及ばずながら「開かれた明るい希望に満ちた建設職人社会」を目指して活動を充実させていきたいと思います。

藤田　仮設業界のリース・レンタル、メーカー、専門工事会社の創業者の方々は、われわれの父親にあたる世代が多いです。組合発足当時は、創業者の方々も若かったのですが、そろそろ次世代の方々が会社の中枢にいるところも増えています。われわれの世代も、創業者の方々の安全に対する思いや願いを継承していくべきであると考えています。「開かれた明るい希望に満ちた建設産業」を実現していくためには、創業者の方々だけがやるのではなく、われわれの世代も引き継ぐ意味で「青年部」を設置したことはとても意味のあることだと思っています。

宮内　そもそも、かつては建設職人という存在はとても輝かしい存在であったわけです。一昔前までは、子どもがなりたい職業ランクには「大工さん」がありました。しかし今は全くそうではなくなりました。われわれは、建設職人の地位をもう一度輝かしい存在に戻したいという願いもあります。そのためには、われわれは、建設職人を支援して下さる政治家の皆さまを超党派で応援するスタンスをとり続けたいと思います。

◆◇◆

和田　佐古さん、青年部をどのように運営していきたいと考えていますか。

佐古　例えば、車の運転一つにしても、昔はシートベルトをしなくても大丈夫でした。それが最近は、高速道路では運転者や助手席に加え、後部席もしなさいというふうになりました。おかげさまで、かつては1万人もいた交通死亡事故も5000人以下に減少しました。しかし、僕ら建設現場で働いている人たちの人命を守る法律というのは、なかなか前に進みません。確かに一般人と特定の建設職人に対する安全の違いはありますが、どんな職種であっても安全は守るべきではないかと思います。

「青年部」の情熱と志が主導的な役割を果たす

そういうことで、國松理事長の「ドクターヘリ」と本組合の活動は非常に近いものがあり、大変勉強になります。

ところで國松理事長、私は十津川村出身ですが、この村のことはご存じですか。

國松　「十津川郷士」で有名ですね。

佐古　はい。ものすごい山間（やまあい）で、事故など何かあったら、ヘリを呼ぶしかありません。子供のころは、救急車で隣町の病院まで一時間半かかる場所に住んでいました。ですから、事故や病気で亡くなられた方も結構おりましたので、もしも「ドクターヘリ」がその時存在していれば助かった命も多かったはずです。それを建設現場に当てはめると、とにかく安全が隔たりなく平等に受けられるように早くなったらいいなと思います。

和田　伊東さん、そういう活動の一翼を、今度は青年部の副会長として担っておられるわけですけど、そのことも含めて、安全をどういうふうに感じておられるか、お聞かせください。

伊東　現場の声を直接耳にすることが多いので、そういうものもすべて青年部のほうに上げながら、改善できるものは改善してもらうとか、その辺は進めていきたいと思います。

小野　安全とは、見方が変われば安全が安全でなかったり、危険になってしまったり、危険が見方によっては安全になったりしますよね。また、乗り物でも、飛行機が一番安全だけど、何かあった時には非常に大惨事になるとか、車が一番危ないとか、電車がどうだとか。でも確率でいったら、歩いていて転んだり、怪我したり、もしくは車に轢かれるという確率もあって、生活する上において、安全というのはすべて自分の意識からくるものと思っております。

高校時代をカリフォルニアで過ごしたのですが、ロサンゼルスに遊びに行った時、メキシコのスラム街のようなところがあって、そこで流れ弾が飛んできたことがありました。発砲はともかく、場所によっては、生活すること自体が危険と隣り合わせだなという感じはありますね。

和田　HEM―Netの活動は、人命救護の一つの形かと思います。

國松　足場であろうと、ドクターヘリであろうと、人の命を救う現場は同じことだと思いますね。

先ほどの話で、自動車事故防止の安全については、次々と法制化が行われるのに、なぜ足場の安全に関する法制化は進まないのかというのがありました。ここが一番本質的な問題です。ここをどうするかということを考えないといけない。

残念ながら、足場とドクターヘリの場合は、非常にマイナーな存在なのです。シートベルトというのは、何千万人といるドライバーすべてにかかわる問題です。ところが、足場もドクターヘリも全国民からすれば、かかわる人間の数が、圧倒的に少ない。救急の場合も同じで、かかわる人間の数は非常に多そうに見えて、わりと少ない。例えば、救急車に乗って運ばれたって人は非常に少ないです。皆さんの中で、実際に救急車で運ばれた人いますか。

和田　確かにそうですね。

國松　いないでしょう。だから、ドクターヘリというのはいかに命を救うのに有効かということを言っても、それにかかわってくる人というか、巻き込まれる人というのはものすごく少ないのです。ですから、なぜ足場に関係する人たちの命を守ることが大切なのかということは、相当声を大きくして訴え、その訴えの仕方もうまくないといけない。訴えることを「組織化」するということが今後の活動の大きなポイントであり、それに尽きると思います。

私も、小野辰雄理事長との対談ではじめて足場の安全問題を知りました。それまでは、何も知らなかったわけです。世の中の人々は、まず私と同じ程度の認識だと考えたほうがいい。だから今、貴組合や政治連盟の使命は何かと言えば、訴えることの「組織化」であり、そのために「青年部」の方々に大いに飛躍してもらいたい。

これは、マイナーな存在であるものの宿命みたいなもので、訴えることの「組織化」を愚直に継続していかなければいけない。

ここは、つらいところですが、おなじ辛さを共有しているのが、ドクターヘリと仮設安全の世界だとつくづく思いますね。

和田　善し悪しではありませんが、どうしても経済至上主義的な考え方がはびこっていますからね。

國松　相手が聞く耳を持たなかったら、持つようになんとか工夫する。組織立てて、横の連携をとり、マスメディアにも働きかけて、聞く耳を持たない人に対しても、なんとか聞いてもらうという努力をしないといかんでしょう。

佐古　僕は社会人のスタートは室内装飾の職人でした。残業しているときに、指の腱を自分でカッターで切りました。その時に親方から「おまえが悪いんや」と言われたわけです。それで、1日だけ休ませてもらって、その次の日から運転も仕事もやりました。それでちょっと駄目になって辞めましたが、ここでわかったことは、要はケガをすると、職人が悪いという風に、僕らも教えられて育ったことです。

和田　一時期流行った「自己責任」ということでね。

佐古　そう、自己責任。足を折ったらおまえが悪い、事故したらおまえが悪い。すべてそんな感じでしたよね。

伊東　正直、職人として感じるのは、現場の声でもなんでも全然上の方に届かないというのはありますね。仮に、それを元請に言ったところで伝わらない。どこに言えばいいのかっていう感じはあります。

藤田　結局、建設職人も仮設業界も末端に位置するものですから、中々上に声が届かない現状がありますが、これは団結力で打破していかなければいけません。

杉山　われわれもしっかりと声をあげて現状を変える努力が必要です。

宮内　仮設業界も今が正念場であり、ここが踏ん張りどころです。われわれの世代がしっかりしないといけないと日々仕事をしながら実感しているところです。創業者の方々が仮設安全という崇高な理念を掲げられましたが、われわれの世代はより現場から近い目線でいかに実践していくかが課題でしょう。

和田　小野さん、先ほど國松理事長が「組織力」と表現されたのですが、もう一歩進めば「運動」としてどういうふうに展開していくかということが試されているように思うのですが。

小野　先ほど佐古会長が話しましたが、仮設機材の経年管理について触れたいと思います。足場も老朽化し、中には40年経っているものもあります。当然、経年管理はしっかりすべきですが、そうでないものもある。いい加減な経年管理をしている足場機材であれば、事故が起きます。事故が起きないような経年管理はどうあるべきなのかという角度からまず勉強していこうと思います。それをある程度まとめて、アクセスの理事会にかけてもらって、そこでまた何か大きな動きができたらいいなと希望を持っています。

いずれにしても、まずアクセスの活動の意義、意味というものを、しっかり僕らが感じなきゃいけないし、まず勉強をさせてもらうということが先決なんじゃないかと思っています。

藤田　ただ、われわれも勉強するだけにとどまらず、しっかりとした研究成果を出さなければならないので、われわれとしても1年後をめどに成果発表をする予定でいます。

宮内　今、仮設業界も経済至上主義により、品質のいいものと、ろくに経年管理されていない製品とがごっちゃになっていて、値段さえ安ければいいという風潮になっています。現場で仕事をするわれわれとしてはここで異議を唱え、しっかりとした仮設製品の経年管理の方向性を示していきたいと思います。

（次号に続く）